

2022 年 1 月 30 日

2021 年度 聖路加国際大学大学院  
看護学研究科 課題研究論文

COVID-19 に伴う感染症対策に従事した保健所保健  
師の活動に伴う困難感

Difficulty of Public Health Nurses Working at Public Health Centers Engaged in  
Infectious Disease Control Associated with COVID-19.

20MN021

田中 知冬

## 要旨

### 【目的】

本研究では、COVID-19 に伴う感染症対策に従事した保健所保健師の活動に伴う困難感を明らかにし、保健所保健師の支援のあり方を検討することを目的とする。

### 【方法】

本研究は、質的記述的研究である。8 名の保健所保健師に半構造インタビューを実施し、分析した。なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けた (21-A049)。

### 【結果】

COVID-19 に伴う感染症対策に従事した保健所保健師の活動に伴う困難感として、保健師は、業務上において【専門職として責任の重圧を感じる】、【膨大な業務量をこなせず、不全感を持つ】、【他機関との連携上での困難】、【住民と医療機関との板挟みになり苦悩する】、【尽力している現状を住民から理解してもらえない】、【アイデンティティのゆらぎ】が示された。

また、業務外では【今まで行ってきたストレス対処行動が取れない】が示され、私生活においても感染予防対策として細心の注意を払った行動制限が必要であった。そのため、日々蓄積されていくストレスを発散することが難しく【心身の健康が脅かされる】ことが起きていた。

### 【結論】

保健所保健師は、COVID-19 感染症対応の地域の窓口となり多岐にわたる業務を行っていた。未経験で慣れない業務に迫られ、専門職としてのあり方を問うアイデンティティのゆらぎが生じていた。それは、無力感などのマイナスな思いをもたらしただけでなく、そこから自身の存在価値を問い直し、新たに再編させていく機会でもあったと考える。一方で、過重労働による疲労は心身の不調をもたらし、生活と仕事の切り替えが難しく調和を保つことができない状況でもあった。

今後の保健所保健師の支援は、組織の備えとして保健師が COVID-19 感染症対応で経験した事例やそれに伴う思いを表出し、改めて振り返る場を設けること、保健師の心身の健康を保つことができる組織づくりの必要性が示唆された。また、個人の備えとして平常時の保健師活動を通して専門性や実践力を高めることが重要であると考ええる。